

世界から音が途絶えたのは、長崎の高校の音楽室のあるコンセントが抜かれたからで、コンセントが抜かれたのは少年がギターの練習をしようと思っただけのことだった。

少年は生真面目な性格で、きっちり二十二時に就寝して六時に目覚め、警備員が校門を開く頃にはそこを通り、ギターを背負っていた。

目的はもちろん、音楽室で、バンドのメンバーにも負けまいと、一番乗りでやってきて練習をするためだった。どこにでもあるような、流行りのロックをコピーする学生バンドで、本番の文化祭は1ヶ月に迫っていた。

音楽室は奥の校舎、四階の隅にあった。そこにたどり着くにも一苦勞、一刻も無駄にできない少年はすでに学ランを脱ぎ、セーター姿でリフを奏でながら階段を上がった。

防音の施された重い扉を押し開け、特有の匂いに浸った。まず明かりは点けずにカーテンを開き、窓は一つだけ開き、窓際に椅子を一つ寄せた。さらに机の上に鞆を置き、ケースを開いてギターをさっそく構えた。しかし手慣らしに幾つかのフレーズを弾いてすぐに飽きてしまった。アンプに接続して大きな音を出そうと、カバンからコードを取り出してギターと繋げた。アンプにつないだが、今度は音が鳴らない。何かと思ってアンプの裏手を覗き込んだ。アンプの後ろは何本もの太さや長さのコードばかりで、何が何のコードなのかもわからず、四組の穴を持つコンセントは全て埋まっていた。

少年はどの穴が何のために使われているのかもわからなかったが、それらのコンセントは全て、やはり何かの役割のために穴に入れられ、役割を果たしていた。例えばモニターや、例えばスピーカー、例えば世界中の音の出力。

少年は生真面目ではあったが、肝心なところで適当な面もあったので、使った後にすぐ戻せばいいと考え、アンプのコンセントを拾い上げ、適当に1つとりあえずはすぐに手の届く一番上の穴のコンセントを1つ選び、ひっこぬいた。ブツツと音が鳴り抜かれたそれはモニター用のコンセントだった。アンプのコンセントを挿し、少年は授業が始まるまで、満足して練習をすることができた。教室を出る時は、窓を閉め椅子を戻し、もちろんコンセントも元のものを挿し直した。やはり生真面目だったのだ。

しかしその生真面目さは、少年を毎朝音楽室へ連れていき、そしていつも同じコンセントばかり抜かれるのは不公平だと思わせた。なので少年は一日ごとに順番に上から順にコンセントを抜いては挿しを行った。世界中の音の出力を行なっている、上から三つ目のコンセントは、三日目に抜かれ、世界から音が途絶えた。もはやもう一度挿し直しても不可能なの

だ。そのコンセントとコードが一体どこにつながっていたのか、それは誰にもわからない。

音を無くした人々は戸惑い、原因もわからずに混乱したが、やがて年月を重ねていくと慣れていった。それから数十年も経った東京の外れに一つの大きな屋敷が建っていた。それを近くの公園の茂みから眺めていたの男の子二人と女の子一人の三人組、しょっちゅう喧嘩はするものの、仲良しとは言える程度の三人組だった。

事の発端は男の子の一人、ノツポが怪しい家と、そこに住む一人の女性の噂を聞きつけたことからだった。ノツポが彼の両親から盗み取り入れた噂によると、その家には一人の三代前半ほどの女性一人が住んでいた。にもかかわらず、夜になるといつも違う男を招き入れているそうだった。三人は子供ながらに、その屋敷に住む魔女（三人の中ではその名前で統一されていた）の正体を突き止めるようとした。

まず最初に調べたのは家の敷地の大きさである。三人で屋敷の周囲を歩き、おおまかな大きさを調べた。その結果、屋敷自体が大きかったものの、さらに大きな庭までがあることが判明した。屋敷は両サイドに別の家が建てられており、性格な奥行きがわからなかったが、屋敷の含まれている一ブロックを、三人と、男の子のもう一人の片割れ、デブの飼い犬と一緒に調べた。一ブロックはほぼ正方形だったが、屋敷を挟む左列、右列にはそれぞれ三つの家が建っており、対して屋敷は途切れることなく端から端まで端から端まで敷地を陣取っていたのである。異様に縦に長い敷地であったが、屋敷自体は両サイドの家から測るに、家二個分の大きさだった。そこから残りの家一個分のスペースに、大きな庭の存在を導き出した。

次に、屋敷の中を探ろうとした、とはいうものの、まず最初にデブと女の子、チビで正面を観察した。家の正面は案外情報が得られるもので、二人の張り込みによっていろいろな情報を導き出した。大きなガレージはほとんど空で、夕方や遅い時間になると車がやってきて、そこに停まった。それから明け方の時間に車は去っていった。大体そんな感じの流れだった。来る車は毎回異なり、車種は外車が多く、同じ車は来るとしても二、三週間に一回程度の頻度だった。乗車している人は必ず一人の男で、基本的に四、五十代、時たまかなり若い男がやってきた。

次にチビが目ざとく気づいたのは、郵便配達の量だった。一日に二階の配達で、必ずと言っていいほど、屋敷には毎回札束のようになった大量の封筒が投函されていた。音の無いこの世界、主要なコミュニケーションツールはやはりデジタルのテキストツールだったが、そ

れを踏まえるとおかしいとチビは思った。屋敷がどつしりと構えている門と、海外の映画に出てきそうなかまぼこ型の郵便ポスト、そして豪華な装飾がされている大きな扉、全てが異質だった。しかし、周囲の住民は気にも留めなかった。音の情報がない世界、気軽に声をかけたかもしれないし、生活音が漏れるわけでもなく、皆、必要最低限の人間関係でことを済ませていた。直接のやりとりは筆談か手話で行っていた。そこまで行うほどの労力を隣人にかげようとはしなかった。誰もが隣人への愛が薄れていった。

もう一つ、気になったのは閉ざされた窓と猫だった。窓という窓には全てレースのカーテンがかかっており、それが家の中の情報を遮断していたが、ごくまれに猫が、決まって三階の右にある小さな窓から顔を覗かせていた。動物好きのチビはすぐにその猫が好きになった。毛が長く、お腹は白く、全体はグレーの毛の猫だった。チビが公園の茂みから手を振っても猫は反応せずただその顔を舐めているだけだった。チビはいつかその猫を撫でたいと思った。

さて、最後に家主の情報だった。魔女は二、三日に一度ほどしか出てこなかった。多くの場合は買い物物で行った。ニット帽を深く被り、しかし顔は隠さずに、普段着から少しおしゃれをした程度の軽装にシースルーのカーディガンを羽織っていた。魔女は脚は長く、髪は束ねずに奔放に解き放ち、そのスタイルは、ノツポとデブは姿を見るたびに生唾を飲み込み、チビは見惚れ、こんな女性になりたいと憧れた。

しかし三人は尾行しようとは思わなかった。買い物をする、近くのスーパーマーケットに限られているが、そこまで行くとバレる、バレたら怖い、と男子達は怖気付いた。チビはふたりの意気地のなさに呆れたが、確かに近寄りたくない恐ろしさがあるのは一緒だった。

しばらくして、外側から得られる情報がひとしきり取り尽くされると、中に入ってみたいと考えるのが子供である。早速三人で話、誰が侵入しようかという話になった。お決まりの手話で役割を押し付けあったが、最終的にはジャンケンになり、一発で負けたチビはため息をついた。ノツポはガッツポーズをしてデブはいじわるな笑いを抑えきれず、チビは半分泣きそうに、半分投げやりになりながら立ち上がった。

だが、そもそも話、扉に鍵がかかっていれば、それでおしまいなのだ。しかし緊張せざるを得なかった。そつとチビは門をくぐり、大きな扉の前に立った。魔女がどうか生真面目な性格で、どうか戸締りをしていますように、と願いながら、ドアノブを握った。ドアノブはくすんだ金色で、下の取手はカールしていた。このようにして家を間近にしてよく観ると、かなり古さの感じられる外壁だとチビは思った。落ち着いた水色は所々はげており、扉

の木目は傷が目立っていた。しかしその適度な廃れ具合が、より一層荘厳な印象をチビに与えた。

さっとチビが振り返ると、公園の茂みからデブとノツポが早くしろと身振り手振りで煽り立てていた。無性に腹が立って再び扉に向き合った。扉は相変わらず大きかったが、チビは逃げなかった。思い切って勇気を振り絞り、ドアノブを引くと、なんと開いた。チビは絶望的なまなざしで、目の前に現れた扉の片割れ同士の隙間を見つめた。もう一度振り返ると、ノツポもデブも啞然とした顔で、扉を見ていた。それがなんだかおかしくって、チビはそのまま屋敷の中に入り、扉を閉めた。もし何かあったら、あいつら二人のせいだと、投げやりになりながらも、この状況を楽しんでいた。

しかし扉を閉めたら最後、不気味な薄暗い光に包まれた。チビはすぐに後悔した。後には引けないと思い、そのまま深呼吸を試してみた。

玄関は広く、ポツンと靴が二組置いてあった。ピカピカに磨かれた茶色い革靴と女物のスニーカー。チビはあまり目立たないよう、玄関の端に靴を脱いで並べておいた。玄関のすぐ隣に階段があった。まず二階に昇ろうか迷ったが、人気のない午前過ぎ、屋敷の住人は寝ているのだと睨んだ。大抵の場合、寝室は上の階にあると予測して、チビはそのまま階段を上がらずに奥の扉へと進んだ。廊下はチビの家よりも長く、そして暗かった。どこの明かりもついていなかったが、どこからか入る自然光だけで、ほの暗く屋敷の中は照らされていた。

チビはというと、お化け屋敷とは似て火なるような、陰気じみた違和感を感じていた。いつぱったりと誰かに遭遇してもおかしくない緊張感の中で、それでも構わずにチビは進み続けた。最初の扉を開くと、リビングと思わしき広い空間に出た。上に飾られているシャンデリアは光源をユリの花に形取られたガラスでできた飾りで包んでいた。うっすらと黄ばんでいたが、明かりのついた様を想像した。それから物置やキッチンと、一回にある部屋を散策した。どれもチビの家より、一つか二つ上のランクの生活感を感じられたが、どの部屋も異様に愛を感じられないような、どこか突き放されているような印象を抱いた。

一階で一番気になったのは、応接室にある振り子時計だった。部屋に入った途端から、時計から目が離せなくなったチビは、ゆっくりと時計に近づいていった。振り子は支障なく規則正しく動いていた。すぐ手の触れられる位置まで近寄って見上げた。木目に張られているガラス面越しに振り子を見ることができた。そっとガラスに触れてみると、微かに振動しているのが伝わってきた。音の出力がなされていなくとも、触覚としての振動は発生し続けているのだ。鏡のように磨かれた振り子の表面にチビの顔が映し出され、ゆらゆら揺れている。

た。目を閉じ、小さな指でその振動だけを体全体で感じてみた。

するとどこからともなくやってきた猫が、チビの足元にやってきた。チビは思わず飛び上がり、正体が猫だとわかると、すぐに猫を抱き上げて触感を味わった。猫は無愛想な顔のまま抱かれてやった。目的を一つ果たしたチビは気が軽くなり、二階に上がることを決意した。玄関に戻り、階段の二段目から上を見上げた。それからゆっくりと一段ずつ登り始めた。猫もチビの後をゆっくりと追って登った。もちろん音が出るわけでもなかったが、慎重に進んで行った。階段のちょうど中間あたりの段で、窓からの光が差し込んできるとに気付いて立ち止まった。カーテンを通して光は階段の角で折れていた、外が見えないかと目を凝らしたが、無理だとわかると再び登り始めた。猫も登り始めた。階段を上りきると、三階への階段は登らずに、二階の廊下を覗いた。一階よりも暗く、扉は閉ざされていた。そこまで来ると、チビは自分の強運を信頼し始めていた。絶対に見つからないという意味で、まず一つ目の扉を開いた。

すると扉の向こうにあった何かに扉が引っかかり、そのままコードが引っ張られて電気スタンドが倒れる振動がチビにもつたわった。そこは寝室で、二人の人間が寝ていた。しかしベッドのそばに立っていたスタンドは倒れ、運悪く睡眠中の男の腹に直撃した。男は痛みで目覚め、部屋の入り口に女の子がいることにまず驚いた。それ以上にチビは驚き、それを通り越してそこに静止して男を見ていた。

結局のところ、魔女は娼婦で、男はその客でしかなかったのだが、男は娼婦が実は既婚者で、その家族が帰ってきたのかと勘違いをし、そのまますぐにベッドから降りて服を着て帰り支度を始めた。そこでようやく娼婦は目を覚まし、なぜか急いでいる客をぼんやりと眺めた。娼婦があくびをすると、猫もあくびをした。男がテーブルに金を置いてそそくさと部屋を立ち去ると、その入り口のそばに少女がいるのを娼婦はようやく気付いた。無言で見つめあい、大きな振動を立てて男が屋敷を出ると、やっと娼婦はベッドから床へと足をつけた。

チビは今なら間に合うと、何も見なかったような素振りや、フイと回れ右をして階段を下り、靴をつっかけてドアノブに手をかけたが、すんでのところ鍵をかけられた。見上げる、娼婦が見下ろしていた。すぐ後ろには猫もチビを追い詰めていた。

チビが屋敷に入っていた頃、デブとノッポはというと、なかなか戻ってこないチビにさすがに心配になり、いくばくかの議論の末、二人で救出しに突入しようという結論に至った。ゆっくりと門をくぐり、扉に近づき、というところで物凄い勢いで扉が開き、二人は

さつと脇に避けた。屋敷から男が飛び出していき、二人に気づくことすらせずに、恐ろしい速さで門をくぐり、ガレージを開き車に乗り込んでサツとどこかへ行ってしまった。呆気にとられて二人がそれを見ていたが、なおさら中で何かがあったのかと急に恐ろしくなり、再び突入を試みた。しかし不運なことに、二人が扉を開こうとしたのと、チビが扉を開こうとしたのがほぼ同時で、それよりも先に娼婦は鍵をかけてしまった。二人はお互い絶望の表情を見合わせた。

それから、娼婦はチビの手を取って二階の、寝室よりも一つ奥の部屋に連れていった。チビはもうなす術もなく、黙って従った。それから二人の後を猫がトコトコとついていった。

チビは今までになく娼婦に接近していたが、あまり直視できなかった。というのも、娼婦が何も着ていなかったからだ。白く綺麗な肌は近くで見ると本当にキレイで、尻から太もも、胸、くびれまで全ての曲線を、チビはキレイだと思った。しかし下着ぐらいは着てほしいとも思った。

その部屋にはいくつものタンスとクローゼット、そして大きな鏡が置いてあった。部屋に入るとすぐに娼婦はタンスの一つを開けて下着を身に付け、それからサテンのスカートとシンプルなHシャツを着た。薄暗い部屋の中でもスカートは鈍くきらめき、チビをときめかせた。それから二人分のエプロンを取り出し、一つをチビに渡した。チビはこれから何をされるかもわからなかったが、とりあえずされるがままにエプロンをつけた。チビには大きすぎて、ドレスほどの大きさになってしまったが、娼婦は満足したように、また手を引いて下へ降りた。

それから娼婦はバスルームでシャワーを浴び始めた。逃げ場のないチビはリビングの椅子に座り、猫がおもちゃで遊ぶ様子を眺めていた。娼婦が風呂から出て髪をとかし出てくると、チビの手を取って上に向かった。猫は娼婦が出てくるとすぐにおもちゃのボールへの興味をなくして、また二人の跡をついていった。

今度はキッチンに入った。娼婦は長い髪をゴムで後ろに一つに束ね、それからワインの木箱をひっくり返してチビへ手を洗うように促した。チビが木箱に乗って手を洗う間、娼婦は冷蔵庫から卵や牛乳や生地を取り出し始めた。一体何が始まるのかしらとチビはただ見つめるだけだったが、娼婦はポウルに材料を開けてチビによこし、混ぜるように指示した。そこ

までいくと、もはやチビはひねくれもせずただ従い、純粹に楽しみ始めていた。猫の見つめる横で混ぜる間に娼婦は丸い型を取り出した。

チビの混ぜた生地を型に流し込み、冷蔵庫に入れて休ませる、その間、娼婦は紅茶を入れた。屋敷にはたくさんの茶葉があった。茶葉の缶を一つ一つ開けてはチビは匂いを確かめ、ストロベリーの香りのする茶葉を選び、湯を沸かして入れた。

生地が固まるのを待つ間、テーブルを挟んで二人は手話で話をした。主に主婦からチビへ、質問をした。というのも、チビは娼婦に敵意はなく、とりあえずは悪い人じゃなさそうだが、と思いつつも、罪悪感も拭えなかったので、チビから何かを質問することはなかった。学校は楽しく通っていること、テストでいい点をとっていること、金城に仲良しがいること、今日は二人も実はついてきていることを話した。

それを聞いてから、二人で庭から表通りへ面した方へ出た。チビがチラッと確認するに、やはり庭は大きかった。堀から二人で顔を覗かせ、デブとノツポがいるであろう茂みをチビは指を刺して教えると、娼婦はそちらを睨んだ。しばらく睨んでいると、二人が恐る恐る顔を出した。そこで娼婦が「お前たちを見ているぞ」というジェスチャーをすると二人はさらに震え上がり、また茂みに隠れてしまった。チビと娼婦は顔を見合わせて笑い、また家の中へ入っていった。

今度は油を温め、冷蔵庫から生地を取り出した。ぐつぐつと煮える油の前に、チビは不思議な気分になった。キッチンには油の熱気で暖まり、二人で静かに油を見守っていた。それから生地を揚げた。もちろん音を出力されないままで生地は揚げられ、そしていくつものドーナツが出来上がった。油が跳ねるたびにチビははしゃぎ、箸でドーナツをつつきながら娼婦は足で拍子を取っていた。

ドーナツは大皿に山盛りになるほど出来上がり、それを持って二人で大きな庭のテーブルに広げた。紅茶を二つ、カップ、真ん中にドーナツの山を挟み、猫は庭を駆け回り、二人で食事を始めた。

ドーナツは一口かじるだけで甘い味と香りが口の中に広がり、まだ熱かったが、チビはたくさん食べた。チビの食欲に娼婦は笑い、そのまま日が沈むまでのんびりと二人で時間を過ごした。帰り際に、娼婦は紙袋にドーナツのあまりを入れて持たせてくれた。屋敷を出るとき、娼婦はまたいつでも来るようにとチビに伝えた。

さて、デブとノツポは絶望的にブランコを漕いでいたが、満足げにチビが屋敷から出てくると驚いて駆け寄った。